論為辯抄

始

へ5
2963
1

2963
1

十論大綱

蓮二房

今子為雜おい蓮二ゝ講從の雜ゝて儒書
ゝ屋宮の二用とあつゝし仰抑ゝ義恋の一段
とはゝてくはゝゝゝ他諸の依談事話ゝ儒師の
為とやゝけて底入ゝの耳ゝ聞ゝ
それゝ事ゝり十論の大意ゝて論語一部と鑑ゝて
世ゝそれゝ子の和節ゝ為ゝ為ゝ孔子の風雅と
ゝ為ゝ論語ゝ孔子ゝ意と為ゝて世石と他諸
の論語ゝ為ゝ為ゝ十論ゝて對向の詞
の端的ゝ為ゝて和漢ゝ世ゝ貴の為後ゝ世連他ゝ

風俗の強果といふべし　されば我家の祖先は
文章訓といふ教誡訓といふ両様の家訓ありて
知らず世代に風雅あるといひ教ゆる人々に勧懲あり
とうけられ知らずとこれ来の和して拝つかまつる
ものとそなふへくまた論説の
一貫ものたる後おのおのとあるもて両訓
知教の差ふと雖とも儒書に現在とくちへて
竹書れ来の文章とと仏教を来とやはり
殺盗婬妄の教誡とちつく畢竟朝四暮三
のたる後あれ家と建つ時のたまたれ儒文仏教
此當用とちつくしたれ文章とつ廃とかつつ
教誡とく実とたくさん文章とちつく仏経とたく

世上一般の風俗とそなへ教誡とそなへ来
世に明らの因果とあるて儒教その差ふと
文章にとられて教誡とこ道一致ちつとも今は
文章と教誡の先後とこ家の説ふるおちつと
ほつて仏階の者ぬとしつ今は儒仏論
つて仏祖通載の全湯篇の補教篇に文章に
いつつ異端辨正と論とさつて我あるも
じ論ひつてとちつ勝負とちくあもつとされと
ちつて釈迦れ子のこと地とちつとも聖人の言語
の輪とつひて塵寶の要とちつあれも儒に今日
の用とそなへて眼おの実とちつあるに実かあるも
悪ちつおもて仏とそのの日の用と認て用ひそな

屋とはいひけん一言も孔子屋をもて其高過
大学をもんをれいれよりも合点して可及其智
不可及其愚をもてはいかに世間の事に
そなはりやすんをもんを言行の有用
ちがひ使いしい有用の実は
屋の説やもてをもて世に儒門に屋い所とい
仰家に云ふ便しいひ俗諺に時宜にしたがひ
有用と可用との用ちを要人者よも達をのを世
ちの道に名利の用あらて畢竟を金銀の財
あれ要者を可用の用にあらひ愚者有用
の用にちーむこれに孔子の智愚をもて世
屋家の事をとりて有用し世用を世出世の

説ちをもんをもや儒道の知をけるかの一生人
にかをれ天を未喪斯文をもて死をとは
む一言にて孔子に一生の骨ちを説有い例の
教誡を先にて孔子道而曰文亦謙辞せをや
道を極のにて文王のをいちる道
にて屋家の文あるを文王をあらて宗廟と
いひ周公とはいて社稷といひをや舜禹湯
とはいて至て最期の調も文王をもひ特業の
至ても周公をもをる孔子に何の用ありやしを有
のんを迫てきをもちて中や首の所に隠て昇下の
調をあらをはいさ新やいけ設い論説の大節ありて
儒を法して斯文の失ちるをとをる〜世孔子文子

う浮れ孔子之施教也先之以詩書而導以孝悌
誦之以仁義いつて詩書を儒者の根ばとして孝悌
仁義い語るのたれとやすもたれとやらけて
遠而有之者師也近而愈明者学也とうかうと
文章の師といひ内うに好学の明とする論語を文先
教後の用とちうて仁義い語るを足ること先後なの
誦ふれ孔子と風雅の古祖をもんもたしく文章の用と
ゆうを用のみて用とうらへ用をまて用とはうきて
非とうう思とも有ることもはうつ身歌
ものとはいうてもとへ黄鳥に子とうもを雎鳩と
衰乎の情とうるうるうきき和漢と文章の作うう信
て文を学ぶ一日用あれとも教を学ぶ一日用あれとも論語

の詩といひ文といひ家語の作文い大ふく語ふうて
その語文ふう雇とちつけいこよの弟子に對しても
れよい古語を書ちうと注者い時の語脈とかむへ
もて様ても起てもに仁義くしに仁義の実とをやる
へ世と憶病の設ふ有はりて人をえ気と養ふつに
ちうとも薬附の剤と故ふうとも病と書ち醫
有ふあつて病人とちるふいむ注有い作有
と動物て言ふのうとを世ふたふへふ補深と
自在のふとふ一たもへ論語を学而ふ篇ふう
時く詩書の文とちふひて居黨の人とちたと
論ふれ亦語りくく亦楽ふたれと戦国の
四ふて孔子と人ふちを卿もいきふる

ととこと故に孔子の三子とかたりて論語の方すい助語にあらてこれらの文章の優柔と況とたれと風雅の詩者哉といむ返てくもりむへきことを論語に注するの世風新あらんをこい子游に牛刀の風諭のごとく子路に勢孔の諫諍のごとき牛のおろしもも勢のたりさし文章の風新い全和にあらて論語と伯文の教訓状あんたるい貴ものもの思ふかの子思ふの孟子の孔子のて孫にれるのおろしをと先ふ風新の中も俗借の学者へ論語一部と鑑とて才一世代の和節とする

一 知和而和不以礼之亦可行ふ才二文代の温厲とをふ一部之也温聽二其言也

厲そよ和節と温厲を訊諫の語抜て訊諫い潛秘の本懐あり中て滑稽の方ふい言語論侯の外に用とあり今日の言語論侯にあらず

一 言語い人間の文飾あり中ると儒学者の孔ふ中て学上達の論語と失てるいれ子の調の表重と中ふ教誡の実と表にて文章の重と重に表にさるあり中や諫やれ門の十哲ふ七十二子の学者ふれ子の虛実とたやくちふれ子の推賞とふくちふて瞻前忽後の譬とたくふい顔回ひふにふるとされい豎回言終日不違ふ中世虛空ふ虛実の二用とあ抜門ふ何ふの違ハさるや言語の御法をふつるて幾言とて

孔子のきゝいや何ものぞ　きゝや解空の称名
い仏家の才子ちゝん仏ちて方代の達順ゝ
一代の廬家とゝれゝいもけれゝゝ花とゝゝて
おゝね不覚の哀憐ゝて天衆帰くゝゝ後死者
不興於斯文ゝとゝる斯文のゐゝゝて何ゝ
のゐゝんゝの顔回さゝ能信而不能文さい廬家
の油ゐと氣ゝゝゝてゝゝ賢ゝゝいゝ愚ゝ
いゝ孟ゝゝれゝの家ゝと仏ゝて教誡の印痕ゝる
ゝゝれゝゝ文章の廬と仏ゝゝゝゝ對向いゝく
ゐゝゝゝて舞の後井夏文のゝゝゝれゝの
愚ゝ似而非ゝゝ者ゝいゝむゝゝて来くの信者
達ゝゝ廬家のゐゝゝゝゝゝゝ論語の

興廢とゝゝに一歩ゝ廬と北ゝ一偏ゝ実と
ゝゝて文教の先後と失ゝゝい怪ゝ北宋の二程
とゝゝゝ北宋の世ゝゝ如ゝ淫靡の比ゝ作ゝゝゝゝゝ
ゝ北宋の世ゝゝ仏ゝゝゝゝゝゝゝ禅家の
廬法ゝゝ例ゝ誠諧の詞とゝゝて儒者の実面
と若ゝゝゝゝゝゝゝゝ論語ゝゝゝ道理のゝ
暇とゝゝゝゝゝゝ廬家とゝゝゝゝ淫靡說
信非也とゝゝゝゝゝゝ權変時宜のゝとゝゝゝ
年ゝ仏者ゝ二家ゝ似是非ゝゝ仏氏之言比之楊墨
ゝ真近理学者當如淫声美色以遠之ゝゝ
ゝのゝゝ剛ゝゝゝ例め文章と後ゝゝ教誡
と先ゝ仏ゝゝゝ勸善懲悪ゝ法ゝゝゝ

仏書も儒書の是に仏ありて儒なし仏なの
れにちうきいたるあり仏を權化といいたい權要
としひ此二業に微笑の密附あれい曾矣に一以の
秘伝あり端木の辯舌を同連の神通もほうり
言偃の学文も阿難の說法も及ばず須菩提の
戒行も闍子の奪の徒れも論ずれい優劣もなく
論語の教も楞嚴の誡もおのおのもの法ましまり
て仏性の妙仏とをるやうあれい外に実学なく
とれ子の絢と杜子の程子の程子の地と仏家に
いはゆむとやはりてうの二程の心よりれて塵寂の用
とをるやうにあるれてをるはるはるはるは
仏不寂の一字あれい廉とおのおのいとをるをるをる

へきをを我朝の実ふんんゆをを儒はををこをのれ実
ありををの威儀ありて仏者の禅法実を仏をを
はをとはををを教とに何をを論語を失ず
をを是を是をを塵寂の是をををいをを
俗諦の宗風をを家を保て酔をくをを今の仏教
いををの用ををを四民をををを五倫をををん
ををを不者の坊をを釈迦の真假ををを
者に今の儒をを実学をををを入て世をの要をを
きかをををを所は雅の言者を是れをの塵寂
をををを者に今の儒家い世界をををを塵
無を今日のれを失をををを書物の曠寂を
ををいを老子の道徒ををを教をを道の

とくおのて二道の非をあらためハそれを惡き賢く
の論しそ丁ぞより我門の俳諧師ハ儒をも佛をもし
あれさるより釈迦孔子の非をなをして言語の疎貶
に遊ぶむとされハ居同八同の嘲をまぬかれ雪隠
貶めとふとも古風に早下の旬とゆくありておのく
ハ助言とやふ合ふもちもあるハ去の子歳とやくらす
まめ日の儒者も佛者もけ十論を疎貶して俳諧
に遊のへ例に我税の実ととゝて刋辰翁の俳のそとく
俳諧ハ鄙飛云之歌の連歌のうら上不之虚をこら
実いよし醋いさし滴いあまりと利好の恒様りして釈迦
孔子の言行をとくるへきよて俳諧いよし言語のあなたへ
ありて十論を世代の急用とするへし

十論為辨抄　始

序段　渡部狂編

茶話禅　此書ハ俳諧の録也祖翁が武江
の佛頂和尚に参して投子一碗の茶也話則を
本て俳諧のさびを悟るより言語に
虚実の変をあらはすより此女子境庵の問答
に遍照と小町が事をあげて先師東花坊
の虚辞あらはくと禅宗の對向を述して
俳諧の宗の援変とえり今新二巻あり
文教　此一對ハ十論の凡例あり父ハ論語の述斎
に教ふる十論をあらはして祖翁の遺訓あれハ

一子も論者の作とし教へ維たの向疾
に擬ふべく我国の学者も論ずるもの
誹諧の名近くても滑稽に諷諫の本懐と
もなりて軽しめるべきにあらざれ
ば笑と雖彼を思ひて文教の先後と
なして儒仏の二地と差あるべき例に俳諧
の微中にして委曲を大綱の辨に入る
亥炉冬扇 此句を解して或人の
後鄙に入て売論衡云作興益之能納興補
説稱如以文進炉以冬扇亦徒耳
矯人 是は拙序に矯世憤俗と云て教に
人和なるべきに学文もおろそ

俳諧も例の淫哇五倫の訓諫とみるとまれ
ども是亦一名あるべきなり論の時宜ありけれ
梓行 所決 此段は論の時宜ありけれ
板行は祖義の減ぬ事なり即家の時を
作るべきに減に釈するの代孫も頑知桟婦
は序に祖義の尊実と信とは俳諧の別に言ふ
に沿りて世はの扶義とする一貞享式の沿決
い才一段にありけ式の新旧に入れ
過當 遺稿所説に過當の三字い是を諧
べきに人の天道の霊発不動とあるべき大道廢有
仁義とのたれと大道動しそ人の有
れに詞の厨の脳に人もの人あ
ものの奥廢を一時

されハこそ昆の的面とせしかバなん儒者ハ孔子を
若しれかし言語の實をしらず喧嘩を商
と失ふもおほくハ此下の詞をしらざるやまた言語ハ
ハ急緩のさかひによりて節と緩詞とハ廢と急
詞といふもあらずして勸懲の用ありて孔門の文にハ
人とをもちふるもの善悪のんを仁義の端としい
志家の文よ據ん人とくらして仁義の衛と
道徒の害とこそなれ故に文章の言地をきはめハ
連続の差なくもなふとも深く言語の訓とてハ
急詞しも冬の用あれハ緩詞しもの用ありて
儒仰の一方差とはかりきる學竟ハ言語の冊目
とするなりとす論一郭ちこそすれ

第一段

天道ノ賛 史記滑稽傳ニ孔子曰六藝之於治一也
禮ハ以テ節ス人ヲ樂ハ以テ發ス和ヲ書ハ以テ道ク事ヲ詩ハ以テ達ス意ヲ
易ハ以テ神ス化ヲ春秋ハ以テ道フ義ヲ太史公賛ニ曰天道
恢々タリ豈不大ナラン哉談言微中亦可以テ解ク紛ヲ云
秦優旃賛ニ曰善ク為ス笑言ヲ然モ合ス大道ニ楚優孟
賛ニ曰常ニ以テ談笑ヲ諷諫スト云云

談笑諷諫 白馬ノ教誡訓ニ史記ハ諷諫の二字
をとりて俳諧の賛としたくきりといふもこれは君を
いさめ父をなぐさめ友達とやはらげむとに實ハ來て
一面をたくらくもの悪をなくさむるハ石と

りて廿と廿とおもてゝことくはらぬれバ彼ハかゝる人
にあらしやうとしけると雇にまみてあるいはその樸嫌
とえゝらいひて凡諫をハ志ハ綿の中に針をふくむごとく
ねを君にけいふ人とならざらしもれと漸く俗にしや
ついて我としやむものにゆかいあやまちをさとらバ
割膝の一夫見よりハ酒色の中にも人ひとしへに
あらはれそれからハ爲也へしかれハ孔子の五経の
諫ハ属辞比事春秋教也といへ令く今の
諷諫にしても書に知れとハ罪我とハそる
勧懲の懲遂ともよりて一或ハ子路とまでむる
そこに詩之諫書之不講是丘之過也といや
これをうるへし詩を連俳ハくまう諷諫の活て

諷諫の大なるハ謔笑なれバ謔笑ハ和漢郎の要
ありてやはとまゝさへ一笑スル心ハ小悪の人なハ儒仰
も信ぜハしれにとを入れし大悪の人なくも今に俳諧
の諷諫あまりてよ聖賢のさまも来らしけれども
孔夫子ハ五経中に諷諫とありて世に代の一道
と建立をむして七十余国と歩りしの人ハ儒も常
にかゝりんあこちにあらしの隠者に笑れあり
吾非斯人之徒而誰与といろ大丈夫のこと地
を嘆をへしるもしけ給へハ才之祓の我とさるの
一對にハみを一丘の説諫ハ解にせぬ

滑稽　史記評林ニ崔浩カ云滑ハ音骨稽ハ流酒器也
轉注吐酒終日不已言出口成章詞不窮竭云く

辨云史記に滑稽傳の賛に孟子に
虞淳の先後したがひ談笑の諫に
なるも風の世情の和説にあたる文
諧語滑利にして智計疾出し
或は敏捷の変に達せる司馬遷の
微中解紛の四字に俳諧を遠く太史公に
勘破されて賛詞を近く東方朔に
なぞらへしなり

俳諧　史記索隱に姚察云滑稽猶俳諧云
俳諧の二字は漢書にもありてかくのごとく分ぬ
ちと古今集にも八字をおろし誹諧のこゝろと
品題とあるにて別に誹諧の一ぱありて然宗

の俳諧とて各ゝのはちうもやけ頃の式目抄
に誹諧に俳の音あるとやそしひありとも侍れ
ども史記の本文を反くべきなれば人の屋馬
に乗りて侍威の字なるべしなを人の屋に言篇
と人の篇のはたは十論一部の大口訣とする一
にて秘事庵の遺稿夜話に俳諧の二字を伝ふる
とて史記の諧林の傳に九段にして二段に司馬遷
にたぐへて滑稽傳は九段にして二段に司馬遷
本書ふり六段を指す孫の附録ありとも毫
俳諧の訓讃とあるに或は賛とたるは
誤あり刘辰翁云滑稽者全鄙藝乃直
從上藝之在詔来也北郎太史公滑稽也重倫

云滑稽而引六藝云語文意又不相屬恐
有誤字他等は他諸とちがひたるにあり
面くの皇柱に掛在を六藝云の子細とも
ちがひたるやたし六藝云の用としつかれ乎
天下の通稱にして儒仏も連俗も世代の雜と
も射御と書數いとこれの義云ふれい或は
或は乎とも乎とも事いたるなり人に
あるいしたがひて万能万義云しつかれとも
と要智しいしたる事とちがひと家業しつ
ちがひたれ子の軍とは用有にとへつかひ
れ子に多和の取あつひたれ力和上のはたも

ずもちがひたれ乎も射御も書數も風雅の
文あるたを野也とそれ門の弟子云とそ
仏法とあるを仏法とちがひたるとあい行者連俗
ありけれ武義を論語の下学上達とも
中忠心下に一道とかへてよ事を義に風雅と
なりしたを早言を世代の達をして鄙義云
も下学も今の名用あるをいたに刈董の
二学士をのれに百倍の太史公とかきて
六藝の名子にちがひめるやをれの学士と
扨下にあるを例に俗諸の異言をもやく
あるあるをちがひたるを合をれ

遊言語　白馬大綱に俗諸の對向あり同日俗諸

い言語と家として世代とやうく道あるべれ
ども科の一とを学ぶ我子貢を祖とし孔子對言
かれて儒佛老の三家ともに言行の二とをあれども
けれども論語ばかりいい言語といふ字を使ひ
いはゆる論語ばかりあるを言いやすく行ひ人に施す
言ひ行ふを天地の己間ばかりをもつてする
ばかりをもつて何ぞ戦国を祖としいまだ政ばかりを
の入用ばかりを文字を通の化粧をもつて釈迦
のれ子のをこ男の人に信ぜられて法を弟に
ばかりの人に河雖迦葉いまを言とひろめ游子
貢にも語ばかりをもつてをれと佛ばかりに儒書と

いふ儒書ばかりに対しのてをと表して言談に有仁
之文世歌樂に有仁之和世とをりたるや言語の
大切なる道に自然の用ばかりを使ひとおこなひ
先ばかれば道とひろむるを言ばかりもつてはれども
言語の似あ非ちを人のをるを要人を
ひとをるをと信人をつを言語いを全て
七性の要をおこなひて要をを万物の屋をおいを
信を一方の実ばかりををもつる俗儒ををの言語を
あつをおもはれの一歩を里の平をいをおもはる一
再問ををもつを子孟子の尺心に論語の行間を細
行をを子張曾哲牧皮をを孔子大志の
人ををを俗儒をを行の行間を佛を再對

云ならば黄白をもつはなるん論語に狂接輿が
こゝに沮溺あつて嫌世人を論に及びて
又子張曾皙がやからにいたりて荘老のたとし
となりて俳諧に似たるを得たり又倫の
ましりた諷諫の作あり君に向て諫之二諫
まれなる伊尹が要之任者也五就湯五
就桀者といふもこれ塵突の豪に達して時宜
に自在の人なるをや君に對て云なれは四維穀
の名ありてもやいふも彼ちこれ時ともかく豪と
ありて智仁勇のこと兼されてもなすにあらとは
もて豪にあるふとこ言語のかく用とありさる
はなきにほかゝ又儒門のすなはちへありても

あるいはとうふ人あつめしたれを言語にたふれ
らうへてとやふやれ子なとはおの對向に言語の
優游自在とするべし今とそ所をそもふとて
俳諧の祖とのたまへる釈迦も世にありてを
燈明仏にのつとり子すて着に周公てありて
のふ畢竟これ塵突の豪をありてよりは
の言語にあらふとする遊の言子を卿とさへ
論語の夫子しこれはの太すと百世の人に頭して
しらは危行言孫しても儒門に属節の秘けり
みして兵に従はに諷諫にとよろ宗路の俳諧しく
いひもありて諷諫の言語とすなふべく山崎老人
の遺訓にゆるやそれ子を風雅の大祖とせんなれ

禹湯文武　遺稿に元禄年の作なる禹湯文武と
作りて之を下に周公孔子連言し仰れるは
他諸の訓誡とちがひて祖系の子削あり之作の
系あり或は文王けさられしかの抜
ぜられしは二篇は十編の大綱あんに例の
過當とくらべやはるる辨の後動
ちがひはいまだ未詳のほどもちて
例の遺稿にくらべ未詳也

詩　一貫初めれ孟論儒仰の建立と称する
云作家禅沈の異端とせられ虚実の二代
の自在ちがと称せ論の大略に沢世に高用の

儒はたくさん事来に推景の作ると信ずる
へ滅ぬ人の説ならしめ孟れと論語の
孔二の命に正とせ権とせ同異
答の虚実自在ある長沮桀溺の事懷
加て異端と攻めるとまると曾子有子
かけてそのちを孟子の孔論に作り
朱程の未の作とかつ権変の法あれ
なれと孔子の遺書にあるとて家説とれ猛
言あり史記に司馬遷の誤あり西方の聖人
老子のつとやら異端と攻るへ王作の事治
やらとれくらい教言に法してれるのかうこい一言
も作人として世界の人の氣の作するやに論語一部

と称し分くる所列揚雲を仰て立ちて叫ぶ
し好るの人あり壺と共にして壺と共にして壺と舞
その歴とたいくるあさつて言語の理屈よろ
ばきて舞ふ鼓腹と頁せるハ飢饉の年の新
毛食ふ所て一本のもとにもとめ下民の指を
圍みまやそれの海濱ら天下のおもて部とも
きそのことおあんをれ論語に掌我とせもく
井仁の答へるもとるへきとおもてや好るの人と
ゝ入て這奴ら言とをやきる盃よの
公孫丑ふむうして知言の自讃しんもとの懇
いヒよ筆美をあゝ念仏論語の実と敬の人を
維子の達子のもを禅法とかゝへて法を不淫

の如拝ありゝ例の歴とをて実とをなさし
報ぶと異端とをもてせものをもて軍法の
謀ふて敵と陣方にもる合点もるにれい
の人くらを表むもの実に実とかされて春の
も肩衣とをれされい論語に和節のを用い
それと和ゝいひいつれと節しいもれるや論語
らゝ此論語をもてあんを減に俗借い歴
実の歴に居て居天竺の儒者仏者と思ひ
我名の汚を連ゝ仏法和漢集の文伝
の花実とをあへ醋吸のこを一度とやりゆ
て酒盛の拍子に楽をもとをれと於実の
称ばふて媒の一字ふ計一對にもるへ

猿田彦　神代巻に先驅猶還て白す有り一神居り天八衢之御に其八尋鏡長七咫北目長七寸眼如八咫鏡而赫然似赤酸漬酒云へり接るに天津兒屋根臣天鈿女等を皇孫の伴供うて猿田に治すのおうしとゝ云へり鈿女い性の佞りさとうる事を意い猶と強しかゝ俳諧の系の訓諫なれと云へり風雅の俳優とも云へり此辨い才二論の神農黄帝の下ゝ見えて

風雅俳優　齋部宿祢廣成古語拾遺に天照大神神嘗祭に前に奉て庭燎を巧作俳優を相與歌舞を云へり接るに俳優の二字い後書ゝ俳諧雜戯也

さてゝ古れい宗廟の太神も俳諧の伏ゝ云へり同じ事ものゝ人い云へ大和の風雅と云へり齋部の詞と記文ゝて俳優と神樂のゝ事ゝ云へり

八雲　素盞嗚尊の詠に八雲立出雲の国に八重垣つくる其の八重垣を主作る歌俳の事と祝い申りて雜俳ゝ云へり

みそゝ人ゝ言やけゝれ業ゝ為ゝ

の事に戯れ申りて俳事ゝ云へり心の外のあさくら人とゝ地ゝ抽ゝ出ゝて

いとゝ集の序詞と作ゝて大事ゝ為ゝ

いひ後章〻に虛實とゝる文章の起結と雜記
法式新四　梅もゝには一段を言ふ篇と人篇と
あつて新四の書れたることは式の差ふ口傳
ありとも今く皮囊の陽秋ゝ云もあるい
今の十論十世の機嫌をとりて例〻印隱の財
あゝ自立式と撰まて（きるゝやうあるい雜名
の一大ゝすれ丁聽ゝ有無實（ダカ）則道不入（ス）とあ
のれ家語ゝ伯常ゝ雜名ゝ作ゝ人や式の新四
へゝに實ゝて（きゝ也
檀林額　江戸八百韻に　寅ゝ年ゝ檀林の木
はり梅の花とゝ宗因の春句ゝ檀林の名い
世ゝ伊ゝ（ゝも或ゝ軍蹈はゝむゝ　ゝ

ゆゝ今ゝゝ或ゝ花とぬむて　ゝゝ
ゝゝの新ゝとゝ　ゝゝ真法ゝ宗因の
比ゝゝゝ所今ゝ風ゝ抜ゝゝゝ有ゝ
今く連ゝに加ゝれい一句ゝゝ誹言の論あり
林ゝ宗因ゝ意ゝ発句ゝ所句ゝ皆ゝ詞の拙ゝ
のゝ行ゝ意ゝ（きゝゝ拙ゝと称ゝ
とも檀林ゝ称ゝゝゝ風ゝの心ゝ失ゝ
ゝれゝゝ風ゝゝ年ゝ祖ゝ遺訓
ゝゝ今ゝゝ五十年の変ゝゝゝ俳諧の上ゝ
ゝゝ人ゝゝ風ゝ我ゝの子和ゝ書ゝ古風の新ゝ
達ゝゝれゝゝゝ子ゝゝ孫ゝ師ゝ言
詰の理屈ゝゝゝゝゝ文章の変化ゝ

論をこの世の世の小言浄面のときに相似のこの
誠としてあるべかりし言に不振の特論とおもへ
とも其これをこの世の授能してれより他の似面非
ちりをこの浄くあくこの新しう

唐虞先　此こまるこの文の字對と辨をへ言に
そこのちをいひて義農のこのこの文きと
とこのあるこの太極世極とぬくこの唐虞
の国このて齊楚こ對このこの例の意と所り
とも浄とこのをこのこの文章のこと信を
面こ十編の文北寄絶ちるを面こ此例こ知きこ

誹讃不知　按をこに此二句こ此傳の要文よりて
文こ論者と青此世セこのこの二句の差おこはよ

へこたもこの心雲奥儀より公任も抑信し此辨
のぶぬあるあるこ中こて法式をこの所とをみて
古人とのをきこのこの此れ人連言の家こ
此このこて言篇の誹諧いこれの論をこの今こ
人篇の俳諧あるいい史記この姚察こ伊文をこと
て凡所も此式も皆くこのぶぬあれこて二の例こ過
當のこの地こてたこの知れも此このぬ新ちる
と詩林こ諧語滑利とこの文章取こて形治
自在このこりけ新ちこの浩の双林寺に假名の碑銘
ありてこ十二句に七字の謎文あり謎の解方
い内陣の秘軸このこの謎文の解方
を漢字の此代このこの但石碑こ謎文のこ
ちこのこりこの

傳曰

一字録の儒仏篇にむかうより儒教をの
こ道としてこの人間とこちらにくたるい教ゆえ孔子
とに虛実の二ありてたとの道と名付
かくこれをたとえ天地の神さまを道とこの
名付あり神てはいまの善悪の道あれとこの
御善懲悪のこのもとまりてたとえい自撰の教
もこの道のこのもとまりさいたるまあり名のなり
へかさい名付けるさとして霊然不動のそなとこの
それを人間世の名忘用にあるもたとえいとと養生
はこのもこれを出の人にもちこれこの世さに老子教
は人君の法のこのはこれらとこのはもちいの教行の

子自産にもこれを表にこの儒はとはあいて今はの
とこのこのもこれを重にこの仏にとはこれをはの教
とはこのこの角にはこのこの事はの表重にも背と
ともるへたとあいてはこれこの仏はこれら推謀
とかれこのこんむこの南宋の孝宗帝の四仏仏慈心
四方を養生四儒治世とも御行にかくこの
道にこれたのこの用とこのもこれこの儒者の仏教
とこのこのもこれたこのこの仏にこの儒書とこのもと
にこれたこれる孝太之吹堂四仏にこの人連音
仏諧の庵とはこのこるも仏諧に連音の変を
あさむきこれも仏諧に連音の変を
に一如のはとこのこるこのこの人間の我執と

いつくしみて和歌の道といふは儒佛神の花し
て其れの理偏ならずうちに指るゝを和歌
神ははかりて神ともに感仰應変のなかにして天文
地理の妙用なりぬるにあらて敬しておそれよ
あれておそれむとされハ人をそうむ一秘して
いはゆると天下の鎮石(おもし)とせる一両部と神家
の汎流にして談義の場の賣詞なれバ例の異端
と致るに及りてハそれを誠や十論ハ儒佛の三用
より遠く老教の方にそとまり近く神道の
理にそとまりて聖賢のこと地よりやむしれハ言語
自在の媒として不用し

故實　所説ハ古代と聖賢の掟をいふ古例とハ

国家の故といひ故実とハ此とりてみてさるの
といひて実の字此解やとかくあるとハ花厳抄
の太瑠璃ハ此の字ニ擬なきれし巻末ニ記りて
本文をそこなひて古人の錯とありとも錯
てもちゆるなや

伊賀素生　白隼抄の自外ニ才子佛し不知あり
大師東巷坊の附録ありて佛の大略ニ記あり
伊賀の城を去て京に住て雅名金作と
いへるハ伊賀ニ四姓ありて桃地営業の中此松尾
氏ありとそむかしの誹諧の名を宗房と云
落髪のちハ桃姓のひきより桃青とも云りき
ハ梅子不熟(ふじゆく)のことありとや世にふれ家名と云け

さるのいひそんナ九の年に官をとりやめて洛陽
に移りて武陵に其の南荒雪といふ人
とともに伊川の草庵に隠遁あること
の年あるべし詩に輝まれの書へ雅俗の
遺状に配合あるべし

天稟一道　むかしより儒仏の大道は釈尊の過去
の七仏を作るべし孔子の現在に七人の仏あり過現
未来に廣宣の企あるべし況やれ子の廣を宣
るべきに周公と孔子とは共に聖人
の他受用なれども百世に王道の大かたくあり
ぬれば一道の祖とも人を智徳いと仰ぎ
られ燃灯仏の授記あるべしいい霧に老徳

比べるべきを家くの仏人あり山
今の仏諸もそれを左極のそれ仏
へ史記を仏文にて言偏に人偏とにおいて新
四の式をとるべる強の一字に十論を勘
雅無遮私　接をるに仏結語に信の一字に
ぬくるべし論を対照に古人をもとして
と変むとるべはもとに儒仏の接説を
対悪へ例の五仏くもいに貞宝の二年へ
古凡もしるべるの仏文と新仏の差
あと信をべるべる信の一字の大騒をる今く
貞享式の用をべるべる家をべるべるや道の人
ありて雑者の眼と看へるべ

第二段

凡雅道理　按ずるに孔子の差別の言葉の
のむねをまもるべし佛諸の家此者ぬくしたもく
ろこと性よりして天命の理の辨用をしけれども
道のなるべきことをしりけれども性のなるべきこと
をしらざる故に道の偏をあやまりいい
性の論をまことをいわざる論者の徴中と雖も
まことに孔子の理をしらざる故なり
あり時はあるとなしとをいふ一にして
無にいりまた時はあるとなしとをいふ
あるなしをあるとなしとをいふ喜怒哀樂

とゝふすとゝる一一誠に拙の好悪へきゝ一定のちひ
あれいそと万物の訳うて傳仰も敬さる為爾
とゝ我さるれい傳はるゝ実の表とゝて也仰敬さ虚
の業とゝ虚ゝ虚ゝ虚ゝ虚の業とゝ虚ゝ実にて
ゝ実の業い虚ゝ虚ゝ虚ゝ虚ゝ虚ゝ虚ゝ実
とゝとゝれい実ゝ虚ゝ虚ゝ虚ゝ虚ゝ虚ゝ虚ゝ虚
翼の傳うゝてとゝゝ一時の入用もゝれゝゝゝ
いゝ時い虚実とゝ実虚とゝあゝゝゝきい言語
の次第うゝてゝれゝと撃石火とゝ向電光とゝ
向不容髮とゝいゝゝゝゝれい学者のゝゝゝゝ
万ゝの表と師匠とゝあゝゝて弟子い千業の一技
とゝれいゝれゝと自恨とゝ自訪とゝ也ゝゝ

釈迦れゝと拷向とゝゝ言語の重ゝとかへし
のゝゝゝゝゝと一道建立の大ゝゝゝゝゝゝゝ也
先後の子子い我家の常傳うゝて拙の好悪と
山訳ゝゝる為ゝ

二條法白馬原道訓と論語の和節と和洋ゝて
二條の法の口語あゝゝゝ訓の畧文に朱一世界の人
和ゝゝゝ他諸ゝゝ歌子兄弟ゝゝゝゝゝ老子
為学早と為ゝゝゝゝゝ時の言語ゝゝゝゝゝゝ
例の虚実に自在ゝれゝ也ゝ次ゝゝゝゝゝゝゝ
史記の談の実と家法とゝゝゝゝ言語の用不用とゝれ
いゝ也ゝ次ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝ猛ゝ勇士の家ゝゝ茶人のゝゝゝゝゝ

うことまくこう馬のくとやてうまとやまちるにおう
こしたれ〳〵こそちるこそいとちるも雅俗のこゝいはりてく
のんなそのうらうちまれてたりあとと俗家の法
ありあさ面のの詩の拙さいくさまれて法を
雅俗のこれやはるとちこうれく男のあるあれ
これと巧言令色をいひて文をけの力味といひ
武をとけの身味とてふ具れを手家拙い頼政
の号の襲と称して武士の邀し法をこう和歌の
怨恨とちなのこちるも仁者必ず有勇にして
文武のこをとも古人ちてこそふ俗者の弟の業
ちもちくしたちやは雅と文章の花ちて文者
貫道之器ちるとせ1俗語とをしまれ人の我ちて

文章の自慢ちるを驕に之ふの法拙とをして
酢とをくかれたるちるくん和節を風雅の酢法を
やし汎ちるを例のおうこちるもやこをこれの
俗文ちるを論語の和節を例のいとかの匡人
1ちるあれたるちるを子路とおもをし将の
おうこさもをれるの對向をはおの優游にて
ちるをちて支子の訊諫をたるんや匡く論語の
俗語ちるとちるく近く俗諧の論語ちるとちるく
史記1劉董の二字さうことくちる俗俗と
おくんを嘗ふ敵汁とをしまれて俗くん賢のて
こ毒とたくちたむ人と俗諧のこ地とちるくてや
こをし誠1今ふこたを儒仏を花のこと味と取合セ

て世代よりの名用にあきらかなる十論一部を心にはかりてそを建立の門路とするへし

世情変極きわまれる変をきわめて儒仏一様の民ふるふるをもて新疎の説をもて仏家の空相をきわめたるにきわめたんはるるなり偏と言ふてせきれいなるも他人をも屈しきわめてそれを射の新疎とするなるべしもとより人の機嫌をくはうるはしかるべきをいかんぞ笑ひもたるべし儒の言字も自他の交の一大ようい記る和の一字あるきをもきわめると雖人の眼力より相似の法北誠しるすありて訓諫し論説をなれば雑説ふれたる場の発きをたとうて世代の書あるを

附説

時を詩のいろ〳〵に分れとなむ〳〵

附説 古人 代詞を賞の相ふるとて不付ものをんい奥羽より相の繁ふれんを遺行夜話し我かの奥羽ものいりて高北北条と竹行きしにある日加茂のいりきるい世界とあるゆる大道もおろそかの極の一気をもて皇とはかりて人の事を行へるなの要人賢人をもるるとそあるより周公孔子と道の本鈍として行書れ系のはとちるる士農工商の義ひとあるるをもてや行を連立をんい祖しらやをい仰しあるむ〳〵古世の古今教義ちるとをの附説して知ちをを史記より行へそれしるを七の言説ふる古人ふるといるむ〳〵はれと

此詞の過當なるは他門の家匠なるもはなはだ
いはれなきにあらず然れどもよまの人あるて此詞を百世
後人にそなへんに系新の意語あるべからず
故毒の歌息をもふにれるとも系将の釣歌あれ
ばやうやうにも詞をもて湘南なる武に
よりてなるべしかれども他人の自体のはなはだかれて
ある其角も例のごとく此詞のはなはだかれて
も自己の俳諧の曉なんとす言法の素と互にあ所家のおもむき
はなはだかれて言法の素と互にあ所家のおもむき
きこと地あるべきやとられども雖他の遺抜とあるべし
我はなれば新の罪人とあるて古今の家匠と歌を
へくるねの人も斯なるあつらへいさるべき遺抜の報恩

俳諸之詩歌　抽きたいはれ五子はけ十編の
解如しかるべしもしかるに詩連俳なる四家
四門と分るべしれども詩と歌は風体あれ歌と詩の
俳諸あるて俳諸之連句なる連句之俳諸
いへきやはなはだ傳作も連俳ありて釈門
なる教者禅者しいれけるべ賢人君子
はれと論語しゆゑして其智可及其愚不
可及なる過猶如不及なれ孔子の下学の用あり
法は頑慳のあつらひもしは輔の拙なるべし
古今集の序にもとも部なるべしもかなるなる
俳諸の所なるべしいかなる編なる拙なるべし

のことばなきとて俳諧之詞なりといふめり
誠に宗祇宗長より兼載紹巴の連歌とて
も耳におどろくに似たる詞も入りて面白き
は別の言語にして俳諧なれば一句の耳に似ずて
二句は意にこたへてさらに異形もあらぬも
少なからず消も二もなれぬもなるを今の俳諧
まで流れぬもとは俗語をもつて此の風言に当る
事はやすくなきものぞくなるとも恥べきその
名をもつて媚びずと人の面はちるるや
尓遠波　助辞要ノ序ニ云助字ハ者詞ノ急緩而可シ
知ニ物ノ之差別ヲ とありされば言語とて韻の二つより
悟発も高く早しともあらんば急緩は言ひのあつかひ

よりて雅俗は韻のひきさしとす一人今様をうたに
西行の哥にも人は花をあやしとせんかれは
いまやうとしてとりよりせ歌は全く俗語
なんにいまやうの雅言にけりひてうしあくる
心の姿をあらはしたるこれぞ俗中の雅とたくらい
て西行は一代一首の模様ありといふものは一字も
詞をかざらずもたらく俳諧体なれは富士の哥也
風にたなびくもありの作にはありけり杜子美
は熊子に妙とゆひて「春水纔深ニ」も「野航恰受ク」
とし「纔侵ニ堤柳ヲ」とし「纔捲ニ浪花ヲ」とも「星」
とひ「月涌テ」とそのこれらの助語は句ごとにた
ありて語「不ンバ驚カ人ヲ死スモ不休セ」とひいうる風雅の

精神とそなはりて感仰とあり
二たび虛實の自在より例のごとく例のごとく
くあるはなれとあるとあるとあるあるおい所と
ひとりもなきしてそれと風雅の優游すて
哀怨し訊諫もなきとあり
名人場　遺稿夜話と西りの富士の高と強ちの
所用と徐讀してみれとと名人の場とそと風と
ちいくの有用と連音すてそと上よのなりけ
いるむとそしいい世人婦女の連徐をへ功名のいなよ
とそ所謂とおれ世ちと名人と称んとそ
おれ兼と立やるなとそなを今の有用とみ用

十知大　十知の二字を論語に沿長よりもして
先後ねと世諺ありそれのれとそ
○子謂子貢曰女與回也孰愈對曰賜也何敢望回回也聞一以知十賜也聞一以知二子曰弗如也吾與女弗如也

今按世章ハ者徵子貢之方人之惡述所宣給吾副不及尚不察夫子之虛實耶彼所責方人之向而可知不暇之對也於然諸抑亦者以與字令註許可之義止乎世與者同也共也或說亦者點吾與女弗如而所謂愚了

子貢ノ詞也了ニ在ル者温而勧善也則責ル字
我子貢ノ時ハ者厲而懲悪也乎論語者知ル世等
之機変ヲ而知ル其時之七十二弟子ハ則可ル知ル其
日之孔子ハ自然ニ聞而所ル知ル者上智ハ者聞ル一
而知ル二了則十ハ可ル知ル万ハ可ル知ル近ル本万法之一
理也則也下愚ハ者聞ル一而知ル一了則亦者黒ク
墨ハ者白ク止ル争ル知ル時宜之変乎乎有則論語
之二與ル十ハ者将直ニ子貢之方人之癖ヲ迚智恵
立ル八段之違ヲ而令ル感ニ子貢ヲ止者必定也
儒仏内證 按ルに論ル語者の辞ヲ
ゐんはらくるの奥義と云に釈如来の道と
阿雖ルとなり孔夫子のろと孟子ひろかり

虐ル天竺ル支ル那ル ゆけい我ゐるもれと仏
て乎ハ法ル子の仏ハ王ル代ル ゆ仏ハ王ル代ル
とふ法ハ然上人の会仏ゐ子と任運ゐ乎ひろ
ゆ子て任運ゐ乎にさそれんとしてをのち
親尊ル日蓮ル道ル乎ル仏の信ルおれへ法ル
ルの乎子ハ支ルひろ乎ル隠ル元の道ル本庵
ルひゆゆるるる阿雖ルて言ひる好色の浮ん
あれん本庵ル紙ル子ル裏の法ありけるル
富貴の人ルゆるひて王侯の家ルあるひて茶の
湯のあるる酒盛のゆゆへ乎和ルるル法ルとひるれ
いたるるるるるるる一時の拙ありル減ル一ルの
建立ル化ル敵ルて我家とかゆれ火雖

水災の変ある事なりと語りし事ありし仏の
事法と減ずるとなる抽象天命の次第あるす
とうとう一分子頂冥府と向上の性面也
頓漸　四教儀に頓漸秘密不定の四教を仏教
の上に次第あるとなる儒書に温厲の二徳を
一一要と仰ぎ給ひ給ふ賢人と言
薩と濁てやうなれば至極のれまもあるべき
ものとなれば之品の外なるとおもひ事は寸法
の判者の下にて見て一一
花厳自在　仏法は花厳と虚空也ともれと所成
の障ありて教誡の虚空といひ文章と花厳
とふなれを抽て論ずれば意まちがいくと虚空

いひてあつふと花厳といひしさうとあり人
いち人もそれなりの人なれば　とれさうして事は設の虚空
の辨は只今を一一今や和漢の詩人は詩歌
人麿と云ふを儒仏と漢人の虚空といひて
行ふ所に花厳の之祖ありとされとやはり十編
のあるぬるとおにに杜陵と西行とを云人
と之祖の差おとをもとる一一
我身功　狐子庵の遺稿に之性圖と抽い圓相
の中に之人の像あり盆と五花井の詩云ふ一
賛を之仏の筆あり今の之頂圖の類也
稲素は此〳〵の人のをもとはよ　芭蕉翁
それをあちこちてはよ　師とれ　仏法竹

既の用此何らたりて早かてん　東花坊
拙きうに付て幸ひ花のかげと不きるあるん
誠に世界のかけ物を圖中に例の智恵をたして
ぬ處の人と看破られへ内電の変りもおとろき
のうてこれに温厚の二おとりる一ふ件を
なら所依のあ心りてはるあらひ文るあらひ
俳諧も人の好悪にかくるもせきこ日ら
とそうはして東花坊を作者とこれて雖沙の
遺状と為りて古今に誹諧のうと說所
天下の古沢と坐断をむりて通に建立の帝
はられへもちられ所回て識文りて愛に世界
の隆盛とられ也

仰項和尚　叶和尚の在世にて天和貞享の比あり
擂鉢に盤珪禪師といひ江戸に仰項和尚と
云天下に龍虎の名名識あり両れも風雅と
稱のうりて武蔵の深川に禪利ありて
芭蕉庵もなにちり

元後楽　遺稿の五秘に雖沙の遺状七通あり所
へ豊紙二枚あり横折一枚い遺物の覚あり
はりと滅ねこ年ときに出ない深く秘ート
されりいいを見ねの事ていう金言の教う
るに世界の叶嘱ちる其言世善うんと遺言
の数と仰写て百世の記念に残るもの也

板垣へ上の下し置候事
ちかつてはなれ候時も
江戸へ新屋敷を
渡子へ上の下し置
江戸へ新屋敷を
不申候事
すこし江戸新屋敷
買置と申候
方へ新屋敷
へ出し申候事

元禄七年十月日　　大久保判

仰付出し申候事
江戸へ出し申候
ぬ新屋敷
禅宗の坊
寺院へ上
屋敷を
渡し板垣
屋敷を
元禄七年十月日

支考は
あの

遺物覚

一　[illegible]
一　[illegible]
一　[illegible]
一　新式書入
一　文章及故実
一　[illegible]

一　[illegible]
一　[illegible]
一　[illegible]

元禄七年十月日

[illegible]

右之湖南の本貫まうてこりあのしるすとをるして
膳所の曲輪をこれはといくに世[illegible]
の書[illegible]代[illegible]
祖[illegible]の月[illegible]
後の子[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
物始終　[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

何すと終ちるてしく親しき同のて及ぶて
れしるとあへ表しを一とれとれすも自立
として自己とされるの教也ちれは此とを
の旅美を田畑名双六の遊一かんてあきるを
俳諧とまるあてまを人ちんこれらに
らやもしそのあとをとるあるとを一
ちなの用をとをを遠地の親切と感を一
人間遊所　按るに此詩を例の形性して古風の
尤人の作者とをしくあるもそとい論語を富而
可求也雖執鞭之士吾亦為之如不可求從
吾所好とをるを論語の人と見てを時
の指詞ありしをやく言語の表裏とあを

れるの吾好遊をしく宮のあを会に人間の作を
とをるしちをそをけ詞を利をれちをめをを
此詞を宮をれん俳諧のを地へこれをの端的
学あをを油ひをを中をしを石色

傳四

神農黄帝　按るに此一對へなを猿田細女の
学指あをを学指の作をちをを也神農を例の
木をを衣とをを百外をあるを学ちれをく
黄帝を堂に衣冠をを一て製をを作論
をを作をとをくをを屬を靈夷の作をを云一
六義　六義を詩経の旅をあをを風を宮角の旅とを
雅を朝廷の公ををいを頌を君王の徳をを風雅頌を

雖とあり賦比興と續とある六種の差別の法なり
しかれども我宗の六義としてあらはれたる風雅
なれども頌とて一方物の類なり文の屬言として
はれも賦として眼おのの姿はたとへれば比として
そなへ興としてそなへたるものなり
うして自他の抑の差別をもつて一つとなる白馬
略文として詩宗とこれ屬言のはたらきなれば風雅の二つ
といはるるなり
沒滋味　按るに向若を全く知るの類みて
上よりもものやうにて知るまでよりあらて
もてるにもとめるまでなる者也はのもの也
又俗語の類とつかひやすの順

ものあるべし又為旨に付ける中の樣の本枝と
はりて大小のわとはりをもてよの為と賦とあ
るいはるるにもとなる作をもてしもるれ
投ずる辭とたとうて茶碗の中に世界ありとも
人とうるる言語の妻ちりて今の栄頭も盃の
負文とおれしくくの人の厚言(アツリコト)あやうされもるん
たれとも味の力味とて禪家の人のふるまひ同也
天中の力　按るに此二字は禪録の常法みて
学ばれとあつるよ抑揚ありたれと儒門にて好
い或て和中の節とうひ或て温中の屬といふ
言中の沒書れて意とあるもてとて言語の
表裏とあるもてとて言語の

才之段

白馬之德　接ちに白馬の之注とて下い智仁勇之者
天下之達德也　孔子の詞とのつおてんれとけ注
のけ〳〵そおそらむけりと此論に再注して智
い敏捷の達とひそ仁と談笑の和とひて勇と
頓挫の言とてけれと仁勇と一歩のそういりて
論語もけ二の說あり仁者能好人能惡人と仁者
吸有勇勇者必有仁とも能好とて仁みて
との能惡といあい勇ふれい仁有いなくて仁勇とかね
とて勇ふれて仁とかねさんと論とれい先後の說とて
それとけとそと智あと一けれと史子とて子路と

武勇とのまつめて仁義好学のうちと說のとうとけて
文道と智のうちあんと文とけりと人い論說の者すい春秋伯
と王道と論とそて居虞の文章と文とて文殷
周の優劣と宜めおに周の至德とおるふ〳〵文王の文い
ちとけれとも武王の武といとて仁とも武王者亂臣
十人とも才雄とも文とりもとけとせくの說名達の
亂臣のうちともあつうと先後おうて例の英雄
亂臣とそく亂世の英雄とてそれと文道とそく対
い者の奸賊とけて意ふうとれ志うに白馬の或周
うと敏捷の智と猿の朝にとけおて仁勇の二と雄陳
あり雄云仁說とて淡笑の和とうて仁の一注とけ
何れと頓挫の言ととのけうや陳云論語とて子路と

賛とゝ[illegible]や君子に有りこの要望の儀然[illegible]
也温聽其言也屬[illegible]所道の[illegible]
て勸懲の二あれ[illegible]
おとゝ[illegible]教化の綱の表裏あんとす

詩歌連句　白馬文章訓[illegible]
あげて位階の論あり風雅を詩[illegible]
やゝもすれば連俳をとれら教業とせく[illegible]
とゝ[illegible]連俳とゝ[illegible]
の文[illegible]俳諧を武ちれいもされ天[illegible]
[illegible]武[illegible]文あるとゝ[illegible]文[illegible]武あるとゝ[illegible]
[illegible]俳諧を訓諫と[illegible]

天下の治見あんとに[illegible]連歌の歴史とゝ
ふゝて武威と文事とゝ[illegible]
とおとゝ[illegible]俳諧を[illegible]歌とあるむへ[illegible]
[illegible]誠[illegible]論の[illegible]君王の信あれ
連俳を[illegible]妄の[illegible]
とゝ[illegible]倭[illegible]武綱公平[illegible]対[illegible]
強弱の三用[illegible]文武の作見とゝるもいれ[illegible]論
[illegible]不謀の位とゝ[illegible]連俳を[illegible]
露[illegible]詩[illegible]儒師とゝ[illegible]
一世の[illegible]
人[illegible]

言語変　[illegible]

論語一部の結文に不知言無知人とて言ハ
凡雅の文章にて文を言ふの年代とす〳〵く
言にて言中の表裏とあるを〳〵無子もたくこと
名ふかく我知言やはりとは言に字面の
表裏にして尋常意を言語のいとまらず七情の
意とあるを〳〵しみたるく言語の深意ここに
知れるも意に意に意にも意に意にもむと婦に姑の祈るを也
とられし言依の表裏にして要人に信ずるの
両用にして愚人に耳に学ぶるとやはり
れるも表裏の中に文を互に中に春秋
ありて一字の褒貶にあるべし是義の子とあるべ

〳〵沒〳〵要の子とあるに沒と稱と
ばいやしくつとめと角らしてそれと沒らるるを及
ハ〳〵んひれるもの依常とあるを君子之言道
矣聽者無察則道不入〳〵此論語の論語の
視觀察もも人とちらも言とちらに用
ちらすとちらい要に信ずの察其所安命
たし要人の表裏にして人のみるして和とこと
それと方便說とつひいたて信人の表裏にしてあを
己うるうして人と所にあるそれと所に安の換言にして
それのちひの加刮ちらう微生いれと疑ひ
て爲佞手とてちこれよもちとこと
かくそれに非人敢爲佞也疾固也とする言語

て時宜の自在と密々に誠に言説の大切なる
ことを北彩回もせずして小人の言同辛君子
の不可察と申すも言説いまだ小人の
むつかしきこと人の書とかくこと
道文章　白雪文章訓て文字の用とする
人に衣冠あるがごとし羽毛のあやなり
雅俗もそなる異もあれども人世の
はれて海中とあらひありくこと
とて人にたとへ文とそなるとそ
とれるもて貴ことと言ひ足志文ひ足言ひ
不言誰知其志言之無文行之不遠
ちうに道といむ文のそなるとかへ

ちて之道の文章に孔子も幾言とゝ
助辭とくくれ言とゆくゆ茂ゆ富言と
而ちうて和の形容に過當ひ
のそよ事者とて幾言もあり富言もあり偉語
もあれ雅言もあれ一字に言ひ文字とゆく
らて一切とと讀ひくとに要に要の言葉も
ちく亂て潤の字葉もふれ尼もうたも讀
ちらして和玉の篇とちてなるもちると秘密
の一法として阿提羅波提羅吽し唵の真尼宿
とそらに化和とちきくらへるとゆくも金とも
ねとて一唱に世の功德あるすい七字にて
のるれあきれとやこれて仏の軍に

て二道とせいもちる云事〜その一ぢいこと
の文とこそ今のこの用とちるなへたる書籍ハ
万差ちるもよそこそもそのの通てもきき
子初ちるにたの字ハ達と皇偏こ十
畫十五畫の字とあつそて人のちるとこ偏
とおるる文章ちる文章ハ俗語の手話ちる文章ハ中こ商の用と違て
一〜と此訓ちこと此の通称ちん

清稽、謹人　接ちるに儒書ハ仰ちる人ちん
論ちる人あれ共ハ秋此ちて何ちるかく云事ちん
何ちるかくと〜の〜ちて向とこちこ事と
ちもこへてちれこ人の用とこそけこれハ或ハ

ちるこ古説ハ此ちと此ハや或ハ何偏の何冠の
と文字宮聲これとこちてたとこ宮ちの
味とちるハ我好の貴人とこちこて我胸の論説
と云ハ我胸の法花と論ちる文章ちる石宮
石座こて事こちこ應変のこちるハこ善悪ハ
こ射のおもにちる一一こ云こ清稽の作文こて
条坊こ小屋こて例こ檀林の師ちるおのく
優梅こ凡此のおこ云こ此ちこ此方朝ちこ
のこちこ此こ此こ此ちこ此ちこ此ちこ此ちこ此ちこ
中こて中こ度中のおこ此ちこ此ちこ此ちこ
こ蔭室の諫こ庵室ハ自在の家者こと〜
胡麻の所方別とこちこ人のこちるの

[illegible]と[illegible]いふ[illegible]を[illegible]と[illegible]もし国家のあけくれ
かなしみ[illegible]ひとりとして誅罰の和説とまつてんの
形容とをもひ[illegible]ねもはつて[illegible]方朝ら不死の辯や
武帝いふ[illegible]いふ[illegible]て車[illegible]製[illegible]あるものの
貴あんにられ[illegible]今いふ清稽のくて智仁勇の
こと[illegible]とをもへて[illegible]死て隠[illegible]かけて[illegible]ら[illegible]
[illegible]言て王子比干[illegible]ら[illegible]やくに[illegible]ら[illegible]使叔齊
[illegible]ら[illegible]ら[illegible]んを[illegible]とを[illegible]あれ[illegible]おの[illegible]
[illegible]男神[illegible]勝とを[illegible]ら[illegible]場あり[illegible]仲[illegible]て貴[illegible]て
貴とを[illegible]ら[illegible]いふ不道の[illegible]の耳に[illegible]ら[illegible]いて[illegible]
[illegible]て貴とを[illegible]ら[illegible]あへい不道の[illegible]を[illegible]ら[illegible]
貴の[illegible]て[illegible]ら[illegible]て[illegible]の[illegible]あり[illegible]ら[illegible]人の[illegible]

[illegible]ら[illegible]儒[illegible]を[illegible]人[illegible]ら[illegible]て[illegible]と[illegible]て言[illegible]ら[illegible]の[illegible]

張儀蘇秦

[illegible]て論[illegible]て哲の[illegible]の論[illegible]ら儒[illegible]の
[illegible]人[illegible]て筆[illegible]子[illegible]の[illegible]と[illegible]ら[illegible]張儀蘇秦ら
[illegible]と辯[illegible]の[illegible]客[illegible]て今の世[illegible]事
[illegible]て[illegible]て[illegible]ら[illegible]て[illegible]て[illegible]
[illegible]て夫[illegible]て[illegible]て世[illegible]の[illegible]用[illegible]て[illegible]
[illegible]の[illegible]子[illegible]ら[illegible]仲[illegible]て[illegible]て[illegible]
[illegible]の[illegible]て[illegible]て[illegible]の[illegible]
[illegible]の詩書[illegible]

きる一さとをもちて用の神文をゝ史記の列伝に
齊田常欲伐魯れを曹子曰魯父母之国二子何
為乎莫出子路子張石請行れを弟許子貢
請行孔子許子貢故子貢出存魯亂齊
破吳彊晉而霸越十年之中五国各有警とそ
されはけの軍とそ為ことをもてをもて分からら
れをゝ父母の墓所とあるそれむより言語をゝ物の
つをねをゝやをゝ太力のをゝをゝをゝをゝをゝ治て
天運をゝをゝをゝをゝをゝ天運の事をゝれをゝをゝ
はゝを作をゝかをゝをゝをゝ将源海をゝをゝをゝに
をゝ功をゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ乱齊
存魯吾之始願強晉驚吳使越霸者賜之

詭義言傷信慎言哉とをゝ修内ゝ教誡の作れ
をゝて行をゝ乃義をゝ掴をゝりけをゝれをゝの家
訓をゝ屈節の二字ありて所詮おゝ治の秘訣と
をゝをゝらをゝ国家の治乱をゝをゝれ風雷疾風
の事とおゝをゝ事人をゝ事をゝ事をゝをゝをゝ
とをゝをゝをゝをゝをゝ天道の動をゝ
れをゝを仁義のをゝをゝとかをゝ使をゝ天下をゝをゝ
をゝをゝ文学をゝ周をゝ政をゝをゝ家を
をゝをゝをゝ言語をゝをゝをゝをゝをゝ言語
を文学をゝ治をゝ連歌をゝの事をゝも能言語の
を用をゝ一をゝ
をゝをゝ治道の源をゝ

虞舜をまねて孫吳の兵をつくりて魏国をうち
こと和の用のごとし況や世の治道をこゝろ
文学を捨て遠きを言法を今の急用にもとめ
ちうと云たのゝ子とをもて戦国の中に生
こゝろをもて時代の運の用利ちうしつゝ
政をもて文学をもしけるを言説をもてくはたてる和
とのゝ天の使令をもてして智と勇とかねさるを
あらしてそこ男の部くわうち治道を干戈の二種
とけこて干戈を治見のやむことをねるはあり
今や治道の五和を捨てゝ仕りい文学を捨ちう
文学を政をもて治をもて政をもて言法をもてこれを
干戈の人と雲をもてりい言説の人と利をもて

ちゝ張儀蘇秦の智術をもて孫吳の干戈をも
捨ちうられ我言を言説をもてはたゝ捨れるも
仁義を知ることをもしけ書をて論説をもて路を勇敢
とあつまりて必ず也温文而懼し好謀而成者也
文をもて風雅の衰ぬとをいひ邪なる言説の智謀をも
ちうとをもて儒者ありて在史のもとを捨ちる
とをもて寧我興子貢之夏跡有太史公所記皆
誰世をもてはたらかい我好の法を捨て在篇の史記を書
今ちうやうをもて人をもてはたれてもの寧我
子貢をもてはたるもてはたる寧我の子貢のもとを常に
不根の持論をもて千古の人和とをもへあちれ
耳のやうちうをもて眼の人をもてあれすはしおくこと

ある人なれと危行言孫とうるを師の廉潔とうく
あるいてもなくしてふ山文過まれに知過有改過ふ
なれと過というあるもとれて死やうそてあやうく
ぬけれと一善惡無記の人といいて師代の家の敬貧子
あり子路の孔子ふ言語の過ありて陳司敗うとうる人
これと孔世家しよりこれのうりはしもこれのそれ直い
德行ふ伯牛仲弓ふ政ふ冉有季路ふ文学ふ
文学ふそそ書物のふ子游とんそふ子夏を
学ふあり言語ふ宰我ふ子貢ふ
と例くふ宰我ふ子貢ふ言語ふ
ふ言語ふ孔子ふ知安りの孔子とまれむとや
なれふ達者の人ふ及ふ世界の人ふ及ふ

なれと仕ふるとうふ人と言語ふ猿ふ烏帽子とうり
ふ宰子一通の書人とふ
と申人ふ
運命ふ一以貫之とうふ一孔子通の書孫世典ふ詩歌
史記ふ孔子の弟子傳ふ論語ふ七十子の節義ふ宰我
子貢ふ辯論ふ張侯蘇秦ふ說客ふ評林ふ
我庭の樹木ふ人の名ふあふ
いふ作の文ふ
宋玉文章　白馬文章訓ふ今ふ紙貨の文ふ知ふ
宋玉ふ招魂の文ふ
詞とふ孔子ふ
ふ二方朝ふ若客雖ふ班孟堅ふ若賓戲ふ

とゝいふゝ古今の賢者と説彼をゝ昇亮い説奚
の訓諫ゝて庵宝ハ文章の宝と弁文章の法格と
七段の評ゝ云ゝ

文章感仰　拝ゝ云に感仰と文章の金言の哀怨有
ゝ云ゝ艶書のゝ様ゝ束ゝ云ゝ思ゝ云ふゝのゝ有ゝ
ゝ云ゝ百牧かゝゝ云ゝ人のゝ此ゝ動くゝ
と後ゝ弟ゝ宮ゝ文ゝ云ゝ弁のゝ云ゝ弁ゝ云ゝ
人と弟ゝ同のゝ有ゝ弟ゝ弁ゝ何の用
ゝ云ゝ言に対ゝ用の用ゝ云ゝ人ゝ叶ゝ高
第九段の可怨ゝ二ゝの評ゝ町ゝ面ゝ
哀怨ゝ田村ゝ思ゝ非の感仰と辨ゝ

我家家法　白馬教誡ゝ此二句の要論あり

我ゝ云ゝ時ゝ人ゝ儒仰ゝ云ゝ弁ゝ
ゝて我ゝ云ゝ時ゝ人ゝ儒仰ゝ云ゝ弁ゝ
のゝ弁のゝ云ゝ此ゝ云ゝ俗諧
ゝ云ゝ弁ゝ儒ゝ云ゝ温和ゝ善ゝ云ゝ
ゝ道ゝ有ゝ弁ゝ儒ゝ云ゝ
仰ゝ云ゝ端的ゝ悪ゝ云ゝ
ゝ云ゝ温和ゝ端的ゝ温和ゝ
ゝ云ゝ言語の表裏ゝ云ゝ儒仰ゝ
ゝ云ゝ人の理非ゝ云ゝ俗諧の
理ゝ云ゝ弁ゝ

うくんにちうして伊尹うを任ずるを以て容を諷諫と
諫諍の差ありてもて言の差をしつれにに
たをむるねと諷諫をもつて危行言孫のいひもはれし
きうふと諫諍をもつて巧言令色のいひはれし
聖家の憲はいかい達ては仲孫とおもて聖
二祖を撰仰とゆつりのもてこれをとめて心るとし
ふとうれたれてもて家の密附すてはこ百いよ
せはの公道ちんう俗諸をいさはは諸ていうて
百世の人とおく達ひ百世の人と忽を恨
ちも連指て人のゆと節て我しと嫌をきるへ
それきてそて人を諷へうも誠を俗諸の一たす
い諸諍し諷諫のやうあれうして密の一をいはは差

おとしきうへしはれをよりを踏う忠を義と
地抽して君子之行已期に於必達に於已可以て
屈則屈可以て伸則伸故屈節者所以有待
來伸者所以及時是以雖受屈而不毀其節
志達而不犯於義とをもはた
可伸則伸とて我ときるはすして所以乃時と
可屈則屈とて我ときるはすして所以有待
ふうきうへのりてしかうことも言説いそれの費
しきうくうして尋意を諷諫のうちをきる一
意にはいはのの意人うるも孟子のれをや
きうきうれに百世のうをいうてに遷をと享
へを疑はれをも世の戦国うに諸の人を

きこゆるなし應聘七十國而屈辱於公卿之門
其不遇也如此とやはらいまいしの評判まへ七雄
五霸の君をおしなへて太鼓もちの孔子なと
裏店の子どもまでいふなれ可伸も可屈も
せぬ口の職あるとやらの徒なるは論語にも時
の多能とも又六もうらむ其算もさし之線も
尺八も上手なれんれんとせし子貢もなかひて屈し郎
求達は要人の權變なれは越王句踐に追從
ほとしへて世にそへてもあてつるもはるは論諛
と諷諫との一步の千里の差なるを此子西が
楚王にあらはして賞忠誅諛の和歌より荊臺
の遊のやむるとれ子を附にたすけて百世に

洒

諷諫の鑑とせんとあかりおかされてし尚おそるへく
秘して小躬に秘さて一もにとをし十二可の家訓
ならんとおもしけるは十段の序に春秋摺伽の下るへと
落．むかしより儒書佛經の學者は三段の[illegible]
あり四知とも般捷の學者は皆ふまれて始あれとも
終あし莊子にいへる太早計の人あり愚痴を
附勝のなる人にまあれて酒色とこゝをはて衣食
とえるつて佛書によるわつ記性の人ありきつるに
今ふ洒落とる大恨の人此頃は般捷にも
まあれ附勝としゆるされて附勝なる人の信心をおこ
させるへの洒落は害おほしとぞいひけるむかし
一貫材の府るも論語を二程の時にいつくらく

剛毅木訥の仁義にちかしおそるべきは虛實の
あつかひなんぞ探きわめ程ふかき孔門まなびされ
共氏を般捷まなびされしかもこの一
五倫道　探きわめ儒仏の行者達をきはめ
章を仏をむさぼりてそなはれとなりて仏道を
仏ぶつ名をもしかも章文をぬすみいつしかの間にて第一
又倫の名數をかぞへ来歴を孔子をもまなび
なを何ぞとなれば倫ぞつねなる
なし　角をのんとかへ
と雖をもとめ大地の和とのんにたれもの聽
りの名ぞかれかけの意を脫きて天を捨れ
なのもちをもきはめ和のもつはなを天と

もちもの色をもたれを天孔子和をく富をもの名
貧賤をもあれをもし憎むも愛をもの意孔子
名色をもれ五倫のもつはもの喜怒をもの意
あれもはなしはもの喜怒をもの名をもの名
怒の名をもはもと愛人の道孔子をもの
意の意をもくもつもの孔子をもの
次に所食の飛沫しかも最美のもの有無
もんの富貴をもの孔子の有無
ちの人ありて仏孔の顛倒もはなもの
其人喜怒　探きわめ世俗の事話をもまあれ
をも捨孔の法れあれもたれもまくの意なり
或をもの孔の意にもまくもたれ

時あり或は四条に住する人あれば新
さらしあり時あり或は酒色にまかせ
小鍋と云ものもむおにおりあり
るゝことを例のあれもそこの詞を耳とき
ゆむもち用をあらそひ人とくるもあり
てそこを以よりて百にもてそこるを
仏諸の席をこそ出あん軍中の交間をうて
世代の用をたんのこれ

傳四

仏諸内證　仏法と儒仏とこれ法を
いかゝ対勝とたくてこれ
禅代と仏法をたくて人の信心をとくこと也

信仏寒山拾得の竈のおに知識とかくて
国字のる敬をあさむきるこきれこと仏法
此風あり公うあ法の一ゝ内法の信をおよて
一ゝ法れと仏法師あるふんて豊干の虎と
やあるこゝ
法むの時て油ひを手さき
信徳二字　拾をるに信の字ふ馬を親者
の書据うて信ふ和ゝ内わ風
人ゝ和ゝあるゝ信ゝ仏法の新文あんきるを法
上と敬いとと意ゝ信を方今とおもれ
ゝて儒仏と表むきの設代あれ

とあるされん儒門のれ僕と王帛の陰洞も仏家
の所属と有力の檀那も詞の表裏とゆるゆる
ばらんやそと仏法とゆるゆる時い柿の樹とよ美心種
とかくて六ヤ六つの国の実地と植ゆるも一至愚
一粒ばらの信んとなるとばれて仏書も
心施賦施あれいちを孫も言送賦送ありて
表むきの優劣からをかれて信んをもて信賦
とかくこう信言とをもて信賦とかくへれと
美ばらくて不ばらくいむもちろと儒門もと
施播して貪ちを賦とをもてれとをもて
れるに世代のとをと感を一ばらの代と家業の
致思に手孫の栗とろろろい敬叡う車と

ちりて微夫二子之賦則丘之道治將廢
とやこれとを無隠手雨とうる要人の実語
ちりに渡手ちの今ちと人品とかるれるる名利
といるんし意の名利と我ちちあむ美悪の
誡ををちるやちられ今ちの信ちは走を
のんに翼ちて賦用をもちとちるんをも
陰徳　白馬教誡訓と陰陽報を教の陰ねちて
例の子面とゆちの一ちれをと世代とゆるを
をちんいを人ちとちをもをていをちれ百金の大
ちをとをちるむをを人のちりて一言のれといて
を金い塀へ拾ちるも同おあり一をちちると
陰陽とを子誠と陰のおゆいちるをちんいの

おなじとまうしてあしこう却ゆる人の足とめうまねく
そなはれるまことを人とむくへこれも却ゆる人まこと不報
の罪あり　れよの植雖とこそ　そ夫生徳於子
うまこと拙の愚心の業言うまあるまこと今日の業に
信をうまかりて功とさうのゆうまこと也たれと拙師
うまへ拙の簡在ちうまうり不顕惟徳とつい仰師
い拙と形容して学ぶの家とうまうまと天上の
五義うまこと　うまり人の業あるて他とたくまうまと
うまれ全くたねの用をうまてあうまく向此
方おくまうまへまうまうまこと　まうまうまこと
例と一歩のそうまれなりて我のうまうまと小人
うまい人のねうまうまると　うまうまとうまうまと不伐善不施勞

うまこと儒門と顔回う徒りうまと禅家の達
い武帝とたくうまうまて一寸走三の我のうまと
うまこと功徒の返うまこうまうまうまこと